

見上一幸

みかみかずゆき 公益社団法人仙台ユネスコ協会会長
1946年生まれ、神奈川県出身。70年、横浜国立大学教育学部卒。73年、東北大学大学院理学研究科修士課程修了。75年、同大学院博士課程を中途退学し、宮城教育大学（理科教育研究施設）教務職員。76年、理学博士（東北大学）。94年、宮城教育大学教授。環境教育実践研究センター長、宮城教育大学附属小学校長、宮城教育大学総務担当理事・副学長などを歴任。2012年より学長を務め、18年3月に退任。19年5月末日より現職。

笑顔の人だ。それが儀礼的なものではない証拠に、ユネスコの活動や長年研究してきたゾウリムシに話が及ぶと言葉が熱を帯び、満面に笑みがこぼれる。

今年5月31日、ユネスコ（国連教育科学文化機関）を支援する民間組織である公益社団法人仙台ユネスコ協会の第14代会長に就任した。その1年前から同協会の顧問を務めたが、それ以前は発生物学の研究者として40年以上にわたり宮城教育大学で教鞭を執った。ゾウリムシを材料にした発生物学（研究や科学教育、環境教育、さらにはESD（持続可能な開発のための教育）の振興や東日本大震災からの教育復興に取り組むなど活躍は多岐にわたる。2012年から6年間、同大学の学長を務めるなど、大学を舞台に研究者、教育者として一筋に歩んできた。

見上会長とユネスコとの関係は大学在職中に始まる。ユネスコ国内委員会のメンバーとして深く関わり、宮城県で開催されたユネスコ・アペイドセミナーやユネスコの理念を学校現場で実践するユネスコスクールの拡大にも携わった。「当時、アペイドセミナーを宮教大が請け負っていた関係で、気仙沼で開催したことがありました。寒い時期の開催だったにもかかわらず、寒さに慣れない国からの参加者のために市民のみなさんが防寒着を用意してくれるなど、地域を挙げて協力していただき大成功に終わりました。その後、国連大学総長が気仙沼を視察に訪れるなど、アペイドセミナーのひとつのモデルを示せたと思います」

そんなあるとき、仙台とユネスコとの関わりを強烈に意識する出来事があった。韓国のユネスコ国内委員会を訪問した際、先方の委員長から「ユネスコの聖地である仙台からようこそいらっしゃいました」と挨拶されたのだ。「実は当時、私は仙台が民間ユネスコ運動の発祥の地だ

と知らなかったのです」と少し照れたように笑う。

見上会長が語る通り、仙台はユネスコに関係する世界中の人々から「民間ユネスコ運動の聖地」として知られている。それは1947（昭和22）年、世界で初めてユネスコを支援する民間組織として仙台ユネスコ協力会（現在の仙台ユネスコ協会）がつくられたことに由来する。まさに仙台は民間ユネスコ運動の「発祥の地」なのだ。

前述の韓国訪問では、ユネスコスクールのネットワークについても刺激を受けたという。帰国後、文部科学省に日本での状況を尋ねた。「そうしたら、当時は20校ほどしかなかったことがわかりました。せめて50校ぐらいには増やしたい。力を貸してほしいとお願ひする一方で、まずは自らの足元から始めなければと宮城県内の小中学校に呼びかけて一気に目標の50校をクリアしたんです」。このとき確立したのが、大学が地域の学校を支援してユネスコスクールのネットワークを拡大する「宮城方式」だ。その後、わずか10年ほどでユネスコスクールは日本全国で1200校ほどに増加した。「民間ユネスコ運動の聖地」の面目躍如と言える。

そして今、大学から仙台ユネスコ協会に舞台を移して若い世代の活動を後押ししようとしている。ユネスコ憲章が掲げる「一人の心の中に平和のとりでを築く」ことの表現には戦争や紛争の種をなくしていく「積極的な平和」が必要で、それを支える民間活動が重要だと訴える。「若い人たちが積極的に外に出て、さまざまな国の人たちと付き合い、お互いを理解していくことが大切です」。民族や宗教間の紛争、社会の格差や分断への危機感が世界に広がる中、民間ユネスコ運動の役割は一層重要性を増している。

